追 手 門 学 院 大 学

一貫連携教育研究所紀要

第5号

2019年3月

追手門学院大学　一貫連携教育研究所

ISSN 2189-3551

Bulletin
of
Research Center for Integrated Education System

Vol. 5 March 2019

OTEMON GAKUIN

Research Center for Integrated Education System, OTEMON GAKUIN UNIVERSITY
2-1-15, Nishi-Ai, Ibaraki, Osaka, JAPAN

はじめに

一貫連携教育研究所長　三川　俊樹

一貫連携教育研究所は、「独立自彊・社会有為」の人材育成という追手門学院の教育理念に基づいて、「志の教育」「自校教育」「心の教育」「キャリア教育」「国際教育」及び「一貫連携教育」を機軸として学院の教育目標の具体化を図るとともに、総合学院としての一貫教育及び学院内外の連携教育を企画・推進し、学院における教育・研究の一層の充実・発展に寄与することを目的に設置された機関であり、2016 年 4 月から追手門学院大学附置の研究所となりました。

2015 年度からは、「心の教育」「キャリア教育」「国際教育」を重要なテーマとして設定し、こども園から大学までの計画的かつ継続的な教育の系統性について検討するとともに、こども園から大学までの計画的かつ継続的な教育の系統性について検討するとともに、教育内容の策定および実践に取り組んできました。

また、2018 年度の研究テーマとしては、こども園では「幼児期の終わりまでに育って欲しい 10 の姿の育成について～異年齢交流を通じて～のびのび∞プロジェクト」、小学校では「『心の教育』についての考察－小学校の劇指導を通して」、中・高等学校では「キャリア発達の促進を目的とした『個別』『協働』『プロジェクト』型の教育プログラムの開発～希望ある未来社会のための新キャンパス×新校舎×新教育」、大学では「初等中等教育における一貫連携教育の推進－表現教育による幼小・小中連携」、「初等中等教育におけるキャリア教育の推進について－キャリア・カウンセリングを活用した『キャリアポートフォリオ』の作成」および「学校・家庭・地域における『心の教育』の推進」が掲げられており、各所員を中心に研究が推進されているところです。

2018 年度に刊行する一貫連携教育研究所紀要第 5 号には、東田充司所員（大学基盤教育機構教授）による「大阪偕行社附属小学校における舞台発表の史的考察－片桐武一郎第 8 代校長の実践」が掲載されており、西日本最古の私立小学校である追手門学院小学校の表現教育の歴史とその重要性あらためて認識することができます。

追手門学院がこども園から大学院までを有する総合学園として、子どもや若者の心の成長と発達を促し、希望ある未来社会を生きる力を育む教育を推進するために、これまでの教育実践を歴史を踏まえて新たな教育内容を策定していくための貴重な資料となることを願っています。

追手門学院　一貫連携教育研究所紀要

第5号（2019年３月）

はじめに …… 三川　俊樹

大阪偕行社附属小学校における舞台発表の史的考察
－片桐武一郎第８代校長の実践－ …… 東田　充司　1

私立大学の組織改編下における学校資料の収集整理
－追手門学院大学記念資料室から学院志研究室資料室へ－ …… 小倉久美子　11

2018 年度活動報告 …… 23

2018 年度所員一覧 …… 23

一貫連携教育研究所紀要
第 5 号　2019 年 3 月　pp.1−10

大阪偕行社附属小学校における舞台発表の史的考察

－片桐武一郎第 8 代校長の実践－

基盤教育機構教授　**東田　充司**

はじめに

追手門学院小学校では、11 月の文化祭において学級劇発表を行う伝統がある。西日本最古の私立小学校が誇る教育活動のひとつが舞台での劇発表であり、表現活動が盛んな全国の私立小学校を牽引していると言っても過言ではない。創立 110 周年記念事業の一環として設けられた 110 記念ホールが、その披露の舞台である。最大 900 名を収容できる本格的なホールは、昭和初期に全国のモデルスクールと称された大阪偕行社附属小学校時代の講堂の後継施設であるが、いずれも小学校単独の施設としてはそれぞれの時代に類を見ない水準でのものである。それ以前の旧講堂が無かった明治・大正時代には、隣接する設立母体である大阪偕行社本社の講堂で行われていた。27 期生で 1916 年（大正 5 年）卒業の森脇竜雄氏寄稿の山桜会報第 3 号によると、「偕行社の講堂は、（中略）学校の木造平屋の粗末な建物にくらべて、おそろしく立派に思われた。厚い絨毯が敷かれ、豪華なカーテンが重々しく垂れ下がっていた」とのことである。施設面からだけでも、追手門学院小学校は前身の大阪偕行社附属小学校の発足まで遡って、舞台発表を行う背景として極めて恵まれた施設を有していたことが分かる。

筆者は、36 年に渡って所属した追手門学院小学校から、本年度追手門学院大学に異動した。2015 年に日本世代間交流学会第 6 回全国大会が追手門学院で行われた際には、佐々木実初等中等教育長、田邊雅一幼稚園長と共に、「母校が繋ぐ多世代交流－私立小学校を例に－」というテーマで、会場校シンポジウム報告を行った。そのご縁もあって、本年度行われた第 9 回全国大会において「演劇による心情育成－疑似体験による世代間交流の試み－」の発表を行った。2008 年に 122 期 4 年に組で行った学級劇に関して、本年度に成人を迎える卒業生の劇発表後 10 年の意識の変化を分析したものである。

この研究の発端は、追手門学院大学に在籍する、ある 122 期 4 年に組卒業生の存在にあった。この学生は追手門学院中学校を経て、追手門学院高等学校を表現コミュニケーションコース 1 期生として卒業している。まさしく表現教育における一貫連携教育の体現者であると言える。さらに、この学生の保護者も追手門学院小学校 80 期卒業生であり、在学中はもとより今回の学会発表にあたり、保護者ネットワークを挙げての調査への情報収集にご尽力いただいた。世代を超えて親子間で

継承されている追手門学院小学校で実践されている表現教育への深い理解を、改めて感じる機会でもあった。

130 年の時を経て、大阪偕行社附属小学校から伝承される舞台発表の史的考察を試みる中で、より良い一貫連携教育を推進するべく小論を記す。ここに大方の御批正をお願いするものである。

1. 大正初期までに大阪偕行社附属小学校で行われていた舞台発表について

国家有為の人材の育成を創始とし、社会有為の人材の育成に継承される教育理念は、1888 年に創設された大阪偕行社附属小学校の時代から現在まで脈々と継承されている。創立 70 周年を機に刊行された『七十年志』によれば、大阪偕行社附属小学校では創設当時から舞台での児童発表の機会があったが、各教科におよぶ研究発表会としての位置づけであり、単に劇発表だけを目的としたものではなかった。以下、戦前の偕行社時代には「学芸練習会」と称した舞台での研究発表会の箇所を引用して、その概要を示す。

学芸練習会

児童学業の奨励と、平素学習した事項の練習をなさしめると共に教授訓練の統一を図り、公衆の面前に於て思想発表の能力と、決行の勇気とを養わんが為に、毎年（十一月）学芸練習会を開催することにした。これは全児童の練習を本体とするが、人員、時間、材料及び児童の程度により尋四以上と尋三以下の二部に分けて行うこととした。此の外臨時に学年を単位として学級学芸会を開くことがある。（尋四以上学級自治会の事業として毎学期一回位開催）

学芸会の材料は広く各教科より採り、談話、説明、解説、対話、朗読、対読、斉読、輪読、英語会話、実験、手工細工、席上揮毫、描画、独唱、合唱、斉唱、楽器演奏、速算、暗算等各種の方法により一人の出演時間を短くし、成るべく多くの児童を出演せしめることとした。教材により又その演出法に興味を持たせるために多少演劇に類する方法をとることもあるが、全然教材にない劇をやらせたり、又特別の舞台装置をしたり、衣装をつけたりはさせないことにした。（大正七、八年頃からは一般小学校で学校劇、児童劇と称して、子供的な劇がだんだん流行してきた）

効果的な演出法としての演劇の価値を認めながらも、あくまで研究発表としての学習内容が主体であることが分かる。演劇的な手法については、あくまで「多少」であって、特別の舞台装置や衣装を着けさせない指針は、数少ない男子小学校として発足した質実剛健の校風からの推奨によると推察される。戦時下および戦後の中断を経て、1949（昭和 24 年）年に戦後第 1 回の学芸会で劇発表が復活した際には、保護者手作りと思われる劇衣装を児童全員が着用している写真が残っている。手作り感に溢れ、華美を極力避けているところに、偕行社時代の教育風土が継承されている。この点については、現在でも保護者に作成を依頼する劇衣装について、華美になる可能性が大きい

という点から貸衣装は一切認めないし、どの様な化粧も禁止である現在の追手門学院小学校の教育方針との指針と合致する。

現存する最古の教育内容の記録として、1915 年（大正 4 年）に刊行された『大阪偕行社附属小学校学報』が存在する。本校設立の趣旨および沿革・学校規則・教育の方針とその施設等、当時の小学校の全貌が詳細に記録されており、当時の本校の教育を語ると共に、日本の教育史における貴重な資料でもある。大正期に我が国の小学校において、学報の発行される例は極めて稀であり、しかもその内容の充実には瞠目すべきものがある。

この学報発行は、大正天皇御即位の大礼を記念してのものである。さらにその背景には、その 2 年前に着任した片桐武一郎第 8 代校長（1913 年から 1938 年まで在職）の存在がある。創立 25 年目にして初めての文官校長であった片桐校長は、弱冠 29 歳で小学校長に就任し、剣道の創設をはじめとする教育内容の刷新、二度に渡る校舎新築、同窓会、保護者会の組織化など、次々と学校改革を進めることになる。25 年間に渡り自ら教壇に立ちながら、天下の名門校と称せられるに至る牽引者でもあった。この学報の中では、着任早々の片桐校長が行っていた教育の詳細を覗うことが出来る。

この学報の中に、大阪偕行社本社の講堂で行われていた 1914 年（大正 3 年）学芸練習会の演題一覧が掲載されている。（なお、引用に際しては、旧漢字は常用漢字で表記する。）

学芸練習会順序　大正三年十一月

◎午前之部（自午前九時　至同十一時）尋常科第三学年以下、　　略之

◎午後之部（自　正　午　至午後三時）尋常科第四学年以上

一、一　同　入　場

一、一　同　敬　礼

一、学校長開会の辞

一、演　　芸

一、競　　馬	（朗読）	尋五	二十五名
二、数　　蘭	（説明）	高一	一名
三、平和なる村	（暗踊）	尋六	四名
四、青　森　県	（説明）	尋五	二名
五、席上揮毫	（随意画）	尋四	十名
六、天慶の乱	（談話）	高一	一名
七、菅原道真	（談話）	尋五	二名
八、楠木正行	（朗読）	尋四	六名
九、廣瀬中佐	（朗読問答）	尋四	六名

十、七生報国一死心堅再期成功含笑上船　（書き方）　尋五　五名
十一、水平の母　（朗読談話暗唱）　尋五　四名
十二、軍馬の忠義　（朗読）　高一　三名
十三、珠算の練習　（速算）　尋四　十六名
十四、石　　炭　（説明）　高一　一名
十五、北　海　道　（説明）　尋六　三名
十六、諸葛孔明　（朗読）　尋六　三名
十七、加藤清正　（談話）　尋五　三名
十八、英　　語　（対話）　高二　三名
十九、エドワードジェンナー　（談話）　尋四　三名
二十、何時も精神　（朗読）　尋四　十六名
二一、酸とアルカリ　（説明）　尋六　二名
二二、ナポレオン　（談話）　高二　四名
二三、欧州戦乱の原因　（談話）　高一　二名
二四、日独戦争に就いて　（談話）　高一　二名
二五、蠶　（談話）　尋四　一名
二六、水害見舞いの手紙及び返事　（朗読暗唱）　尋五　四名
二七、測候所参観の記　（朗読）　高一　一名
二八、昔の族　（談話）　尋五　二名
二九、徳川吉宗　（談話）　尋六　一名
一、唱 歌 金 剛 石
一、学校長講評　及び閉会の辞
一、一 同 敬 礼
一、順 次 退 場

演目は、その時代や国内外を問わず幅広い教科科目から選ばれ、尋常科 6 年に加えて高等科 2 年の在学者が存在したことを勘案しても、発表内容の高さが見て取れる。創設時より行われていた、日本の初等英語の先鞭を付けた対話による英語発表も、私立小学校としての大きな特徴である。談話、説明、朗読、対話、対読、斉読といった区分表記から判断できる範囲ではあるが、大阪偕行社本社の講堂舞台では、発表にあたって何等かの身体表現も付加されていたのかもしれない。創設当初より英語が正課であったことに加え、社交ダンスを学ばせていたことからも、その可能性は考えられる。

創立百周年の記念事業のひとつとして、卒業生記念文集が発刊され、筆者もその編纂委員の一員として数多くの寄稿文を読む立場となった。卒業生の方々に投稿を呼びかけるとともに、『七十年

志』、『八十年志』、『山桜会報』、（追悼録）『片桐武一郎先生』に寄せられた手記等は再録された。残念ながら、ここでは明治・大正初期に在学された方の新規の寄稿はなかった。ただ、1907 年（明治 40 年）から翌年まで 1・2 年生に在学の 20 期生である伊吹武彦氏（京都大学名誉教授）が『八十年志』への寄稿文に、当時の舞台発表の様子が綴られている。以下、氏の「昔語り」から引用する。

> 二年生のはじめであったか、講堂で学芸会があり、私たちの組は遊戯か何かをやった。たいへん尾籠な話で恐縮であるが、舞台の上で熱演中、だれかがウンチをして泣き出した。事柄が事柄だけに、そのときのことははっきり記憶しているが、共演者の名はもちろん、粗相をした子の名はまるっきりおぼえていない。ところが、ふとしたことから、共演者の一人の名が二十五年ぶりにわかったのである。私は京都の三高に進んだが、そのときの同窓に大岩誠君という人がある。大学を出て間もなく京大法学部の助教授となったが、滝川事件のとき、滝川教授に殉じて京大を去った。この大岩君と、私はある日なんとはなしに幼いころの話などしていたが、彼はふとこういった。――「二年生のときの学芸会に、たれかがウンチをしてねえ」――それを聞いて私はびっくりした。「ぼくにもそんな記憶がある」――「じゃ君とぼくは、三高で同窓だった上に、偕行社もいっしょだったのか。」――それにしても、あの時の“犯人”は君だったんじゃないか」――「いや、君らしいぞ」 いずれにせよ二人は“臭い仲”だということに話は落ち着き、二人の校友はずっとこの思い出といっしょにつづいた。

これらの内容に加えて、沈滞気味であった学校の教育と組織の改革に精力的に取り組むことを目的に片桐校長が着任する背景を勘案すると、公立小学校で行われていた学芸会と同様の舞台発表が行われていたと推察する。ここでは、1907 年（明治 40 年）に小学校規則を改正し、軍人養成を教育目標としない学校に転換した事実を特記する。翌年の 1908 年の入学者 49 名のうち、軍関係子弟はわずか 6 名であり、財界、法曹界、医学関係者子弟から多数の入学者があった。片桐校長による教育改革を進め、建学の理念である国家有為の人材の育成の為の、特色ある私学教育の前段階と考えられる。

2. 大正中期から大阪偕行社附属小学校で行われていた舞台発表について

片桐校長が教育改革を進めた大正中期から昭和前期、創立 25 年から 50 年の四半世紀は、文字通り大阪偕行社附属小学校の全盛期であった。この間、教育の充実と信頼される人材の輩出が社会からの信頼を得、「大阪の偕行社」と世に喧伝されるに至った。名門偕行社の名が広がったのは、創立時からの独特な建学精神「国家有為の人材育成」や教育内容の充実にあったことは言うまでもないが、四半世紀に渡り教育活動推進の中核となった片桐校長の功績が多大である。片桐校長の定め

た教育目標は、戦後改められる点を除き継承され、現在まで追手門学院小学校の重要な教育目標として継承されている。この点から、名称は異なっても、今でも同一基盤に立つ教育が実践されている。

陸軍の将校クラブである大阪偕行社が設立母体であるにもかかわらず、多くの卒業生が厳しい躾教育と共に「自由な校風」を回想し、その背景として必ずと言っていい程に片桐校長の存在を挙げる。4 年生以上の英語、5 年生以上の剣道、6 年生の修身を自ら教え、全校児童の氏名を記憶していた。1938 年（昭和 13 年）卒業の後に（旧制）北野中学校に進学した 49 期生の稲畑勝雄氏は、2000 年に大阪府立北野高等学校同窓会六稜会の取材に際して、以下の通りの回想を述べている。

> 私は大正 15 年 1 月 14 日の生まれですから、今年満 74 歳になりました。兵庫県の芦屋で生まれて、すぐに京都に住んでいた祖父の所へ移りました。そこで小学校 3 年まで育ち、それから大阪の上六の近くへと引っ越しました。
>
> そこから大阪偕行社【かいこうしゃ】付属小学校に通いました。今の追手門学院ですね。この小学校は北野と同じように自由な校風の学校で、片桐武一郎という有名な校長先生がいたことを覚えています。1 学年 90 名、全校生徒が 540 名いたんですが、片桐校長は生徒全員の名前を覚えていたとのことです。昭和 13 年に卒業して北野中学へ進みました。偕行社からは 12〜3 名も入ったでしょうか。優秀な小学校だったんです（笑）。

山桜会報第 14 号への寄稿文「校長在職二十五年間の追憶」の中で、学習指導方針の記述がある。「画一主義、詰込主義を排し、自発的に自己の力を開発するようまたは子供の個性を尊重し個々の能力に応じた学習指導に努め、各自の学力増進のため教師は常に工夫研究してこれにあたること。」である。また、「児童の自発活動によってそれぞれ自己の個性に応じて学習事項を会得することが肝要である。」とも述べている。これら片桐校長の教育方針こそが、それぞれの自主性や自発性を伸長させ、卒業生からは「自由な校風」と受け止められていたのである。大阪師範学校卒業後すぐに大阪師範学校附属小学校訓導に採用され、そのわずか 4 年後に大阪市立道仁小学校の教頭に迎えられた片桐校長は、師団長から大阪市長への校長適任者推薦依頼に基づき大阪偕行社附属小学校に着任した。この経歴からも、極めて優れた力量を有した訓導であり、自ら理想とする教育を大きく展開していったのであろう。

では、片桐校長の児童への指導の実際はどうであったのだろうか。ようやく片桐校長の理想とする教育実践が順調に推進し始めた頃、教え子である 1922 年（大正 11 年）卒業で 33 期生の岩井公平氏は、追悼録『片桐武一郎先生』で下記の通り学芸会での英会話発表の思い出を語っている。

> 校長室の方へは幸い呼び出されたことはなかったが、唯一度六年生の時（多分卒業式の時？）学芸会があり、そのリハーサルには毎日連続して校長室に呼び出され片桐先生じきじき

に絞られたことがあった。その時の演しものは片桐先生御担当の英会話であったが……。当時一般の小学校で英語を教えていたところは余りなかったと思うが、そんな時代に英語を課目に採り入れ、しかも校長自らが教鞭をとられたことは特に勇断であり、非常に進歩的なお考えをお持ちになっていたことが窺え唯々敬服するばかりである。学芸会の英会話は坂部幸雄君との対話での舞台の両袖から出て来て出会いがしらに“グッドモーニグ”“ホアッチュアネーム”“マイネームイズ　イワイ”“ホエア　アー　ユーゴイーング”“アイム　ゴーイング　ツー　カイコーシャ　プライマリースクール”……位まで今でも覚えているが、まがりなりにも五、六分間英語をしゃべって、“グッドバイ”で幕になったのであるが、参観の父兄から万雷（？）の拍手を頂いたことであった。まだアルファベットもろくに覚えていなかった我々によくもあそこまで根気よく教えてくださったものと感心すると同時に、先生がいかに新しい教育に熱意をお持ちになっていたかその片鱗が見えて、今更ながら頭が下がる思いである。

昨年度のことであるが、岩井公平氏のご子息より、お父様が長年保管されていた数多くの小学校在学当時の写真を学校にご寄贈いただいた。校長室で多くのお話しを拝聴したが、いかに片桐先生の教えが素晴らしいものであったかを、お父様がいつも口癖の様に言っていたことを強調された。

また、岩井公平氏の一年後輩の 1923 年（大正 12 年）卒業で 34 期生の近江友七（鈴木太良）氏は、同じ『片桐武一郎先生』に下記の寄稿を寄せている。近江氏はその当時神戸山手女子短期大学教授であったが、教育界で活躍する卒業生が片桐校長時代には特に多い。以下引用する方々もそうであるが、優れた教育者であった片桐校長の影響が大きいのかもしれない。

無職隠居
先生の風貌　古武士　さわやかに英語国語教へたまひき
英会話　学芸会に上演す　英語の先生　われに役立つ
先生に　国際会議報告を　聞いて貰ひぬ。同窓会にて
大正の代は　自由主義　文官の校長として、偕行社に来
友垣の自由びと　ここに集ひをり。先生のこと　口にしつつも
友垣は　横のつながり　先生の縦のつながり　口ぐちにすも
現職にあること　毎日歩くこと　養生訓を述ぶる友あり

やはり、学芸会での英会話発表が挙げられているところに、片桐実践の実際が見て取れる。さらに、「自由主義」や「文官校長」に、旧来の教育に囚われない新教育へのあくなき追及の姿勢が読める。さらに、同じ 34 期生の坂上武一氏は、城南学園理事長であったが、城南学園小学校の初代校長であり、城南学園中高等学校第 3 代校長でもあった。追手門学院校友会山桜会副会長であった坂上氏が、大阪城南女子短期大学を創設するにあたり、1933 年（昭和 8 年）44 期生の林匡夫氏

（大阪城南女子短期大学元副学長）を招聘する間のいきさつを、林氏は編者として追悼録『片桐武一郎先生』のあとがきで次の通り回顧している。

当時山桜会副会長であった坂上武一氏（大正十二年卒）が昭和四十年、短期大学を創設されるに当り、私に教授として協力するよう強く推されたのが実は片桐先生であったことも今忘れられない事実である。昭和三十九年、数回にわたる坂上先生のおすすめにも、自然科学者としてはともかく、大学の教育者としての踏み切りが仲々つかなかったので、はかばかしい御返事をしなかった私の元に、片桐先生がわざわざ足を運ばれ強くすすめられた結果、私を踏み切らせたのが片桐先生のお力であった。現在私に少しでも教育者としての能力がありとするならば、そのかくれた能力を洞察して引き出して下さったのが、坂上学長と片桐先生のお力であったと言える訳である。

一般的に、大学や高等学校ではない、小学校長とのここまでの師弟関係は考えにくい。英語、剣道、修身を自ら教えていたことに加えて、日常生活での児童との触れ合いが実に大きかったのである。初等教育が人間形成における基礎教育であることは言うまでもないが、率先垂範を教育の第一義とする片桐校長のお思いを、教え子がしっかり受け止めているのである。実際にあたった教育活動の様子を、片桐校長は山桜会報第 13 号への寄稿文「偕行社時代における私の教育理念」で、こう述べている。

以上が私の在職二十五年間の一貫した教育理念で、偕行社精神といわれたものである。この方針の実効を収めるために私は事務を執らない時は校長室を出て子供達の生活圏に入り込み、子供達に接触して膚から肌に訓化の浸透を図ることが大切で、躬づからの率先垂範が最も効果的であると考え、いつも先生方の先頭に立つか、少なくとも何事も一緒に行なうことに努めたのである。（中略）

私は学校構内正門西側に舎宅があったが、昼食の際は宅から持たせて来た弁当で各学年交代で教室で子供達と会食して、食事中や食後にいろいろの話をすることとした。この会食は各学年とも担任先生にもやって貰ったのである。このように、できるだけ子供に接したので、その氏名は勿論のこと、その性格や成績などを知ることができ、教育上大そう都合がよかったのである。（中略）

私の在職二十五年間に卒業した者は千六百名（昭和六年までは一組だけで約五十名づづ昭和七年から二組となって約百名、大正七年まで高等小学校があったが、中学に入学できなかった者だけで極めて少数であり、しかも一学年だけで二学年卒業というのは殆どいなかった。それも大正七年からは六年卒業生全部中学に入学したので大正七年から高等科を廃止した。この内約二百名ほどが戦死または病死者で現存者は千四百名くらいだろう。

それらの卒業生の中には、大学の教授となって世界的権威者として有名になっている学者も相当にあり、その他官界、政界、実業界、刀圭界等社会各方面で重要な地位に就いて活躍し指導的役割を果たしている人が多数で、学校設立の目的が十分達成せられ、名門校としての声価を挙げていることはまことに慶ばしい限りである。

片桐校長が目指した教育は、自発的に自己の力を開発するとともに、ひとり一人の個性を尊重し個々の特性を生かしたものであった。現代においても理想的であり、誰もが目指すべき初等教育の姿である。双方向授業の必要性が叫ばれて久しいが、片桐校長が偕行社で実践した児童の発表の場が、講堂での舞台発表であったのである。

おわりに

1 万 3 千人を超える大阪偕行社附属小学校以来の卒業生の声は、現代の追手門学院小学校で行われている教育を論究する際に不可欠である。創立 25 年目から四半世紀の片桐校長時代の卒業生 1600 名の恩師への声は、教育への優れた見識と実践への賛美はもとより、稀に見る素晴らしいその人柄に至る。教育界で解決すべき難題が山積する現代においても、立派な指針として高く評価すべきものである。追手門学院小学校は単なる戦前から続く歴史の長い伝統校だけではなく、貴重な片桐実践を継承発展させる中で常に最先端の教育に対応し、特色ある私学として求められる教育を継続しているのである。

山桜会報第 71 号で、1936 年（昭和 11 年）卒業の 47 期同窓会 9 名での対話記録「さあ、80 才にして起とう」が掲載されている。この中で、入江国太郎氏が片桐校長の教育に対する強い決意と母校の教育の先進性を語っている。中興の祖としての片桐校長を表現したものとして、小論の結びにあたって引用する。

普通校の遠足と違って、お菓子は持参禁止、弁当は梅干しだけの日の丸弁当（昼食時には先生が点検に回る）剣道は正課、玩具であっても、執銃教練もあった。（運動会の花形は模擬演習）

しかし、当時としては珍しい民主的な教育もあった。生徒相互の選挙で級長を選び、級長会で生活の申し合わせをした。音楽教育も五線譜で教えられた。英語の授業もあった。これらの民主授業が取り入れられたのには、片桐武一郎校長の、軍部に対する只ならぬ抵抗があったろうに…と、今つくづく思う。とにかく不思議な学校で、総合して“良い進学校”であった。何よりも、背筋をシャンと伸ばす躾（しつけ）を受けた事に、感謝！

参考文献

同窓会山桜会（1958 年）『山桜会報第 3 号』：追手門学院同窓会山桜会：p.16.
八束周吉編（1958 年）『七十年志』学校法人追手門学院：pp.94-95.
百年志編集委員会編（1988 年）『追手門学院小学校百年志』：追手門学院小学校：pp.176-177.
片桐武一郎編（1915 年）『大正四年十一月　大阪偕行社附属小学校学報』：pp.21-22. p.150. pp.230-231.
天野利武編（1968 年）『八十年志』学校法人追手門学院：pp.344-345.
六稜 WEB 運営委員会編（2000 年）『われら六稜人 2000 年度版大阪府立北野高等学校』六稜同窓会：第 31 回　第 1 映写室
林匡夫編（1981 年）『片桐武一郎先生』片桐武一郎先生を偲ぶ会：pp.145-146.
校友会山桜会（1968 年）『山桜会報第 14 号』：追手門学院校友会山桜会：p.9.
校友会山桜会（1967 年）『山桜会報第 13 号』：追手門学院校友会山桜会：p.15.
校友会山桜会（2003 年）『山桜会報第 71 号』：追手門学院校友会山桜会：p.10.

一貫連携教育研究所紀要
第 5 号　2019 年 3 月　pp.00−00

私立大学の組織改編下における学校資料の収集整理

ー追手門学院大学記念資料室から学院志研究室資料室へー

一貫連携教育部　学院志研究室　**小倉久美子**

はじめに

追手門学院は、1888（明治 21）年に設立された大阪偕行社附属小学校を発祥とし、今年度をもって 130 年目を迎えた。現在、こども園から大学院までを擁する総合学院として「独立自彊・社会有為」を理念に、各世代の教育に取り組んでいる。ゆえに追手門学院にまつわる学校史資料は 130 年間という時間軸と、初等中等部・大学部という領域の広がりとをもつ。

学院志研究室は大学の部局である一貫連携教育部に属し、学院にまつわる資料を収集・整理保管・活用する。保管する資料の大半が大学のものであるが、初等中等の資料も少しずつ収集を進めている。なかでも 2019 年春、大学に隣接する追手門学院中・高等学校が安威キャンパスから総持寺キャンパスへ全面移転することに伴い、中高で保管される学校史資料が今年度に大量移管されたことを付記しておきたい。

現在、学院志研究室の資料室で保管する資料は大学開学当時のものをはじめ、逐次刊行物（紀要・広報誌・パンフレット類）、入学卒業式の答辞送辞、ネガフィルムを含む写真、会議音声テープ、記念品、制服など多岐にわたる。これらは学院志研究室がすべてを収集したわけではなく、大学組織改編の波にもまれながら、いわば地層が堆積するように溜められていたものである。その根底には学院志(1)を大切に守り伝えようとする歴代関係者の思いがある。本稿ではそうした思いを汲み取りつつ、学院志研究室資料室に伝わる資料の来歴をまとめて報告する。

1. 学院志研究室のあゆみ

学院志研究室が管理する資料室は、記念資料室(2)という名称をもつ。この記念資料室についてはかつて「学院志研究室 News Letter」第 7 号(3)で簡略な紹介文をまとめており、さらなる詳細は後述するが、1983 年に記念資料室が設置されたのに比べ、学院志研究室の設置は 2013 年であり新しい。そのため資料室の沿革をまとめる前に、まずは学院志研究室の成り立ちを述べておきたい。

学院志研究室設置の契機は、今から 10 年前の追手門学院創立 120 周年記念事業にある。2007 年、創立 120 周年記念事業の委員会である教育構想委員会と記念志編集委員会とにおいて「学院の

歴史の中に教育理念を置いて、それを検証してみたらどうかという意見が出され」(4)、記念事業のスローガンが「伝統を深め、未来を拓く」であることから、学院の歴史を意識した教育理念の見直しが図られた。2008 年 9 月 19 日制定の「追手門ビジョン 120」において「学院の教育理念「独立自彊・社会有為」にもとづく魅力ある私学教育の実現」が基本目標のひとつとして掲げられ、その具体的方策として 2010 年 6 月に出された「将来計画推進委員会答申」において「自校教育の推進～オール追手門をめざして～」が提言され、自校教育が明文化された。さらにその具体的施策を審議する目的で設置された学校教育改革検討委員会は、2012 年 3 月に「学院教育改革検討委員会答申書」を示し、ここに学院志研究室の名が記された。これが学院志研究室という名称が学院の公式文書に記載された初出ではないかと思われる。

かくして学院志研究室は学院附置の組織として創設された一貫連携教育機構のなかに一貫連携教育研究所および心の教育研究所とともに設置されることとなった。ただし、2013 年の設置当初から研究室が始動したわけではなく、その前身となる組織があった。それが学校史整備委員会である。

学校史整備委員会もまた、学院創立 120 周年記念事業における学校史の見直しを契機として 2007 年に発足した組織であり(5)、なかでも卒業生の同窓会組織である校友会の基金により 2008 年に竣工した学院の歴史展示施設「将軍山会館」の基本構想を校友会館展示プロジェクト委員会とともに担った。2007 年から 2009 年にかけて学校史担当の宮本直和氏（大学事務部・教育主事）によって『学院史資料』という冊子がつくられ学内配布、2010 年からは人員が増えたことで将軍山会館の事務所を間借りして活動が続けられた。特筆すべきは自校教育の教材づくりであり、2011 年 3 月に『追手門の歩み』、2012 年 12 月にマンガ版、2014 年 3 月に DVD 版が制作された。

学院創立 120 周年記念事業から端を発した学校史整備委員会の活動は、そのまま大学創立 50 周年記念事業、そして学院志研究室へと受け継がれ、このたびの学院創立 130 周年事業へとつながっている。追手門学院では、学院『七十年志』『八十年志』『九十年志』『百年志』『百二十年志』といったように、また大学『十年記念誌』『二十年史』『三十年史』『五十年志』、また、小学校『百年志』『百十年志』『百二十年志』、『追手門学院大手前中・高等学校創立 50 周年記念誌』『60 年志』、『追手門学院幼稚園創立 30 周年記念誌』『学校法人追手門学院幼稚園創立 40 周年記念志』というように、ほぼ十年刻みで各学舎が年志をつくっている。しかし年志がつくられる直前になって資料が集められ、その後の資料の行方があいまいになってしまうという事態が生じていた。そうした一時的な資料収集が繰り返されていた学校史活動が、学院創立 120 周年記念事業を契機とする自校教育の強化によって継続性をもつようになったと評価できよう。

学校史整備事業は 2012 年度まで大学事務部のなかに組織され、将軍山会館の事務所を間借りして活動が続けられてきた。2013 年度からは先述したように学院附置となり、三崎一明初代室長（経済学部・教授）のもと、初等中等室の一貫教育課が実質的な運営を担った。2014 年度に植藤正志氏（経営学部・教授）が、2015 年度に梅村修氏（基盤教育機構・教授）が室長を勤め、大学附

置の一貫連携教育部の所属となった2016年度から藤吉圭二氏（社会学部・教授）が四代目室長となり現在に至っている。詳しくは末尾の「学院志研究室構成一覧」を参照いただきたい。

学院志研究室にとって大きな転機となったのが2015年度である。それまで室員・調査員による個別調査活動がメインとなっていた研究室の業務の洗い出しがなされ、調査・収集・整理を三本柱に据える方針が打ち出されたのである。そのため学院志研究室に欠如していた整理分野の強化として研究室スタッフに田村綾氏をむかえ、この年から記念資料室のアーカイブ業務にあたることとなった。2016年度をもって田村氏が離職されたのをうけ、その後任として2017年度から小倉がひきつづきアーカイブ業務にあたっている。

2. 記念資料室　第Ⅰ期　－1号館4階の時代－

ひとまず学院志研究室の沿革を述べ終えたので、記念資料室に話を移したい。記念資料室は大学創立20周年を記念して1号館4階に設置されたのを始まりとする(6)。1983年のことである。大学事務局部の庶務課が管轄し、松崎まさ子氏（大学事務局・主査）が学生相談室との兼務で、大学の刊行物や出版物などの整理・保管を担っていた。1988年度から1994年度まで胸永等氏（大学事務局・企画係長）も兼任で加わり、増員が図られた。

現在、資料室には胸永氏が作成された当時の事務書類が残されている。1989年頃の資料によれば記念資料室は①史料室的機能、②文書室的機能、③記念事業に関する資料収集機能、④その他の資料収集機能、以上4つの目的・役割をもって業務の遂行にあたると位置づけられている。①は「本学の歴史を記録する学内資料を網羅的に収集、整理、保存し、いわゆる史料室的機能を果す。」とあり、②は「本学の現実を記録する学内資料を網羅的に収集、整理、保存し、いわゆる文書室的機能を果す。」とあり、③は「大学、学院における過去の記念事業に関する資料収集機能を果すと共に、将来、本学が記念事業を行うに当って役立ちうる資料収集を行う。」とあり、④は「その他大学の将来発展や運営に関わって役立ちうる資料収集機能を果す。」とあり、今日でいうところのアーカイブ化をねらう先見の明に驚かされる。

続けて、記念資料室が各機能を充実させるにはつぎの2点が重要であるという。ひとつはスタッフの充実であり、もうひとつは施設面の充実であるとする。後者はすでに資料室の増設が確約されているとするが(7)、前者について「現状では兼務職員2名が業務に当っているが、いずれの業務も兼務によってはその充実は困難であり、記念資料室もまたその将来発展が期されるならば、職員の専任化は不可欠な課題とされる。」と指摘する。この訴えを受けて1990年度から専任職員1名が配属されることとなった。それが元運転手の杉浦義雄氏（大学事務局・職員）である。1996年度に辞職されるまで6年間、記念資料室の専任職員を勤められた。

専任職員の配属により、記念資料室は寄贈の受入、他大学との交流など、規模は小さいながらも安定した運用がしばらく続くこととなった。1992年6月8日発行の『藍風』(8)第8号には、記念資

料室の紹介とともに、大学の歴史資料の収集協力を呼びかける記事が掲載されている。やや長文となるが当時の記念資料室の現状が垣間見られる記事であるため全文を紹介したい。

記念資料室は、創立二十周年を記念して、一号館の四階に設置されました。所管は庶務課で、一室は主として事務室として使われ、後に設けられたもう一室は、資料の展示、閲覧、保存管理用として使用されています。記念資料室の役割には、本学の歴史資料の収集保管を行う史料室的性格と、本学に関わる公の文書、出版物等を収集公開する公文書室的性格の一側面がありますが、現状では、収集範囲が不十分である等、網羅性に欠けているのが実態です。特に、創立期以後十年の間の資料収集の状態が悪いことや、学生関係の資料に弱さがあること等、幾つかの問題点があげられます。また、形態別では、写真、ポスター、記念品、制服等々の図書資料以外の歴史的資料に多くの欠落が見られます。最近発行された資料類については、部屋の存在が知られるようになってきたこともあり、以前に比べると、各組織、個人からの寄贈の確実性が高くなってきていますが、過去の分については十分補いきれていないのが現実です。

本学に関する以外の資料では、他大学の歴史に関する資料を中心に、できるだけ大学に関係するものなら何でも収集するようにしています。また、教育・大学・追大、インド、オーストラリア等々に関する新聞の切り抜き・整理や、茨木市・北摂・大阪府に関する資料の収集も行っています。

整理については、他大学の記念史等に関しては目録カードの作成をしていますが、当面は収集保管に重点を置きながら、今後は利用者の皆さんが使いやすい方法を検討、模索していくことにしています。

記念資料室は、専任の杉浦（写真）と兼務の胸永が担当しておりますが、まだまだ走り出した船。追大関係者の皆さんの力強いご助力をお願い致します。

初期ならではの実像が浮かび上がってこよう。またこの頃の出来事として特筆すべきは、1992 年 4 月 1 日から施行された「追手門学院大学文書保存基準」の制定である。これにより文書保存の統一的な管理体制が確保されることとなった。この保存基準は 2017 年 3 月 31 日をもって廃止され、現在は「学校法人追手門学院文書管理規程」をもって運用されている。

学内での資料提供は『藍風』にとどまらず、教職員全員に当時配布されていた『教職員の手引き』でも呼びかけられている。1999 年度版の庶務課企画係の業務要項に「刊行物を発行した時には、記録・保管用として 3 部提供して下さい。その他、刊行物以外の物で、記録保管用として適当と思われる資料につきましてもご提供下さい。」とある(9)。

これについては 1999 年に全国大学史資料協議会で実施された「大学（学園）史資料の収集・保存等、運用に関するアンケート」（大阪商業大学谷岡記念館が担当）への追手門学院大学の回答と

も一致している(10)。それは「収集に関して学内（学園）の各部署に普段どのような方法で周知していますか。」という質問に対し、「『教職員の手引き』に、記録保管用として適当と思われる資料を企画係まで提供してもらうよう記載している。」という回答が見受けられるのである。ただし課題もあったようで「大学（学園）の歴史的史料を収集する部署として、また最終保管部署として、学内において認知されていると思いますか。」という問いに対し、「以前は記念資料室があったが、諸般の事情で企画係が記念資料室の仕事をしている。企画係は本来の仕事があって、記念資料の整理に手が回らない。また、学内においても適切な担当部署として認知されているとは思わない。」と答えており、当時の問題点を垣間見ることができる。

3. 記念資料室　第Ⅱ期　－学生会館 2 階の時代－

やがて大学の組織改編によって資料室もまた変革を迎えることとなる。2000 年 5 月 30 日開催の理事会において「学校法人追手門学院事務組織規程」一部改正案（大学関係）が承認、6 月 1 日付けで施行された。これは近い将来に大学の存亡が危ぶまれるといわれるなかで、その生き残りを果すために、「大学の存続発展にとって基本的に重要となる企画・調査・人事・財務・管財等の管理部門における拡充を計り、あわせて組織全体の強化にこれを繋げていくこと」(11)が目的であった。

この事務組織改編によって、庶務課と称する部署がなくなり、記念資料室の管理は新たに設けられた学長事務室が担うこととなった。従来の庶務課は学長の下に置かれた事務局にあり、ほかに会計課と学部設置事務室とが存在していたが、改編後の事務局は庶務課と会計課とに代わって総務課・人事課・財務課が設置された。庶務課庶務係の業務のほとんどが総務課総務係へうつることとなったが、記念資料室業務のみが切り離されて学長事務室へうつっている。学長事務室は学長の下に置かれた学長室に総合企画室とともに設けられた(12)。このとき学長事務室で記念資料室の事務を担当したのが沢田容子氏（大学事務局・課長待遇）である。沢田氏は資料室の整理に努められるとともに、人権委員会に関する業務も兼任されていた関係で、現在でも資料室には多くの人権委員会関連の資料が存在している。

現在、大学事務職が使用する部署フォルダ（共有フォルダ）には、2000 年 7 月 17 日 17 時を最終更新日とする「記念資料室マニュアル.jtd」という一太郎のデータが残されている。おそらくは庶務課から学長事務室へ業務を移行する際の引継ぎとして作成されたものだろう。

記念資料室マニュアル

第 1 条　追手門学院大学記念資料室は、追手門学院大学に関わる資料を収集・整理・　保存する。

第 2 条　記念資料室は本学教職員及び学生、その他の者の利用に供する。

第 3 条　記念資料室は本学の年史編纂に係る事務を行う。

第 3 条(ママ)　資料収集の範囲について

（1）本学の所属部署の発行物

（2）本学の研究機関の発行物

（3）本学教職員の科研費及び出版助成金による発行物

（4）本学学生団体等の発行物

（5）本学の行事、建物、構内風景等の写真

（6）本学関係の新聞・雑誌等の記事

（7）本学教職員の出版物の寄贈

（8）本学の卒業生（校友会）及父母（教育後援会）の会報等

（9）学院関係の学校報等

（10）その他本学に関するもの

（11）他大学の寄贈による記念史

第 4 条(ママ)　資料の保存について

（1）製本保存を原則とする。

（2）製本は、1 部行う。

ただし、大学全体に関わるものは、2 部製本する。

例：「学報」「OTEMON PRESS」等

ここには記念資料室の機能や役割が明文化されており、現在の資料室運営にも継承されている部分が多い。たとえば現在でも資料の散逸を防ぐ目的で保管は製本を原則としているが、それが第 I 期で形作られていたことがわかる。

2000 年度の変革は組織だけではなく施設整備にも及ぶ。記念資料室が中高等学校改革検討委員会と同室化することとなったのである。その前年には視聴覚教室の拡張により同フロアーにあった第 2 資料室さえ消滅しており、ここから記念資料室の受難がはじまる。

2001 年に入り学生課の事務室が学生会館 2 階から別館（旧食堂の地階）へ移動したことに伴い、その事務室があった部屋に記念資料室が移設されることとなった。学生会館 2 階に移設されてからは、「人権・記念資料室」と称されていたことが当時の施設図からわかる(13)。

さらに、2003 年 4 月 1 日に再び事務組織が改編されたことで、学長室・学長事務室に代わって大学事務部・庶務課が設置された。記念資料室はわずか 3 年で学長事務室から庶務課へ担当が替わったのである。ただしここで注意したいのは、この庶務課はかつて第 I 期で記念資料室を運用していた庶務課とは異なるという点である。それは 2003 年度以降の大学組織の主眼がいわば法人体制の強化にあり、かつての庶務課の機能は法人事務局（現在の総務室）へ移行したと考えられるためである。そのため 2003 年の事務組織改編で設置された庶務課は、従来の学長事務室の業務をほぼそのまま引き継いでいるのである。

第Ⅱ期記念資料室において特筆すべきは目録データの作成である。先述した部署フォルダにはこの時期につくられた電子データが残っており、なかには当時の目録も存在している。たとえば「広報写真記録台帳」は撮影日・行事名・台帳番号が一覧化されたものであるが、1999 年度（2001 年作成）のものから 2007 年度（2008 年作成）のものまで 9 つのデータがひとつのフォルダにまとまっていることから、学長事務室の沢田氏が手がけられた整理方法が庶務課へ継承されていることがわかる。

どうやら資料目録もこのころから着手されたようだが、体系化には至っていない。2008 年 4 月 1 日付の人事異動において、窪田好子氏が学長事務室（リエゾンオフィス業務担当）との兼務で、庶務課の記念資料室の担当を命じられている。折りしも 2008 年 6 月 28 日の将軍山会館の竣工をひかえ学院志資料の収集がすすんだ時期であることから人員の強化が図られたのだろう。

4. 記念資料室　第Ⅲ期　－4 号館 1 階の時代－

2010 年、記念資料室は学生会館 2 階から現在の 4 号館 1 階へ移設する。理由は学生会館 2 階の部屋をクラブコーチ室として使用することが決定したためであった。ただ移設先を充分に確保できなかったことから、文化財資料室としてすでに考古学研究会の資料が収蔵されていたスペースを拡張して同室化する手段がとられた。現在においても学院志研究室が文化財資料室を暫定的に管理しているのはそのためである。

このころ、先述したように学院志研究室の前身組織は将軍山会館事務室を間借りして自校教育のテキストを刊行するが、記念資料室の管理業務はあくまでも庶務課にあり切り離された存在であった。2011 年 6 月 15 日付けで庶務課の佐々木展子氏が学友会の各部へ資料寄贈の呼びかけ(14)を行なうなど、積極的な資料補完作業がすすめられた。

やがて 2013 年になると、大学事務部の機能は学長室（現在の理事長学長室）に吸収されたことで庶務課がなくなり、記念資料室は学長室の学事課が管理を担うこととなった。2013 年度といえば一貫連携教育機構の発足により学院志研究室が始動した時期でもある。学院志研究室はその活動のなかで積極的な資料収集活動を行ない、内外から多数の寄贈資料を受けていた。しかし組織上、記念資料室への出入りが許されなかったため、それらの学院志資料は将軍山会館の地下倉庫に収めざるを得なかった。2015 年度の組織改編で大学事務の機能が法人事務へ一本化したことで学事課がなくなり、学院志研究室が記念資料室の整理に着手することとなった。そのため 2016 年度に将軍山会館地下倉庫に収められた学院志資料を記念資料室へ移管し、「将軍山会館移管資料」として管理をしている。

記念資料室の整理に着手する傍ら、資料の収集活動も継続して続けられた。2015 年 12 月には「学院志研究室 News Letter」創刊号を発行し資料の寄贈・提供を呼びかけている。ほかにも「追手門学院大学創立 50 周年記念 NEWS LETTER」Vol.3（2016 年 1 月発行）、「追手門学院とすべての

卒業生をつなぐ、コミュニケーションマガジン mon［モン］」2016 Vol.1（2016 年 1 月発行）、「追手門学院大学教育後援会会報」第 100 号（2016 年 4 月 30 日発行）といった広報誌に各会・各部署の協力を得て、資料寄贈の呼びかけを行なった。このときの呼びかけをきっかけに、今でも資料室には資料提供の申し出をしていただくことがあり、寄贈者とのお付き合いも続いている。

以上のように、記念資料室は大学の組織改編や施設整備の影響による紆余曲折を経て現在に至る。こうした事実は従来の年志において語られることがなかったが、ある意味で大学の歴史を浮き彫りにするものであると思われる。

最後に、今年度の記念資料室の変化について述べておきたい。結論からいえば、現在「記念資料室」と呼ぶ場所は存在していない。というのも記念資料室は文化財資料室との相部屋という形をとっていたが、学院志研究室の活動によって学内外からの寄贈がすすみ、また学内資料の体系的な収集がはじまったことで室内のスペースが着々と埋まりつつあった。そのため資料保管スペースの増設を要望し許可が下りたことで、2018 年 6 月 7 日の室員会議において記念資料室を「学院志研究室第一資料室」、新たな資料室を「学院志研究室第二資料室」と称することが承認されたのである。第二資料室は同じく 4 号館 1 階に設けられ、6 月 11 日から 13 日にかけて資料の移動を行なった。その直後の 18 日に大阪北部を震源とする地震が発生。書棚のいくつかは倒れたが幸いにも資料の破損はなかった。この地震が資料室増設前であれば甚大な被害を受けたことは想像に難くない。

資料室では 6 月 20 日から復旧を開始したが、7 月になって将軍山会館の復旧も担うこととなった。将軍山会館は学院創立 120 周年記念事業ならびに大学創立 40 周年記念事業の一環として大学校友会からの基金をもって建てられた自校教育を目的とした教育施設である。管理は総務室総務課が行なっていたが、開館 10 年を経て展示物の劣化が懸念されていた。そのような折に地震が発生し展示物に被害が及んだのである。そのため学院志研究室の室長が将軍山会館の館長を兼任するよう規程が改正され、大幅な展示替えと企画展を計画し、2018 年 9 月に将軍山会館をリニューアルオープンさせた。展示企画においては資料室で収集保管している資料を大いに活用し、今後も定期的な展示替えをすることを念頭に計画した。

また、2018 年 9 月 13 日には資料室および将軍山会館で博物館実習の受入をはじめて行なった。実習で使用したのは文化財資料室の出土遺物である。さらに 10 月と 11 月には SJ（スチューデント・ジョブ）制度を利用して学生 1 名が資料室でアーカイブ業務に携わった。このように学院志研究室の活動を教育の場へと還元しつつ、“開かれた資料室”となれるよう日々努力を重ねているところである。

おわりに

本稿では学院志研究室資料室に保管整理する資料および現在の学院志研究室にいたる学院資料保存体制の来歴をまとめた。大学史資料を収集整理する機関は各大学で個別に存在するが発足の契機

や担当する部署は千差万別である。まさに、その構築過程は大学のアイデンティティ形成の過程であるともいえよう。これから資料のアーカイブ化が進むなかで資料の来歴を正しく伝えることに意義があったと思う。

今後の活動における大きな課題としては、初等中等の網羅的・体系的な資料収集である。本学院の目指すところが一貫教育としての総合学院化にあるならば、それに応える体制作りが必要であろう。ただ、同じ学校史資料という枠組み(15)にあっても、大学史資料と幼小中高校の資料とを一括して扱うことは相当難しい。将来の充実に向け克服のすべを助言賜れば幸いである。

注

(1) 追手門学院ではいわゆる学校史のことを「学校志」としており、年史も『年志』という。これは先人の「志」を継承するという意味をもつ。

(2) 記念資料室の「記念」は周年記念の意。

(3) 2018 年 6 月 11 日発行。学院志研究室ホームページ（https : //www.otemon.ac.jp/research/labo/gakuinshi.html）でダウンロード可。

(4) 胸永等（当時法人事務局長）「教育理念と学校史について」（『LIBERTAS』No.3、2007 年）。

(5) 2007 年に創立 120 周年記念事業の全体計画小委員会特別委員会として学校史整備委員会（事務所管は創立 120 周年記念自事業事務局）が設置された。その後、2009 年に追手門学院大学教育研究所研究員（学校史研究グループ）が組織されて活動が継続される。

(6) 1969 年 7 月 1 日発行の『追手門学院大学学報』No.5 には、同年 5 月 27 日に竣工した研究棟の施設紹介があり、そのなかに「追手門学院大学記念資料室」の名称がみられる。しかしその実態は確認できず、本稿で述べるところの記念資料室とのつながりは不明である。

(7) 第 2 資料室は 1989 年に同じ 1 号館 4 階に設けられたが、視聴覚教室の拡張により 1999 年には消滅している。

(8) 『藍風』は 1989 年 12 月 16 日に創刊した追手門学院大学の学内情報誌。第 17 号（1995 年 10 月 1 日）まで発行された。

(9) ただし『教職員の手引き』による資料提供の呼びかけは 1999 年度版のみ。『教職員の手引き』は 1998 年度版および 2000 年度版が発行されておらず変則的な編集時期にあったためか。

(10) 福本智安「組織的な資料保存に関する諸問題」（『年史資料の収集・保存－1999 年度全国研究会分科会報告於・金沢大学－』研究叢書第 2 号、全国大学史資料協議会、2001 年）。

(11) 岡本忠（当時事務局長）「大学事務組織改編と新たな歩みに向けて」（『追手門学院大学学報』No.132、2000 年）。

(12) 学長事務室の業務内容は、「社会の動向の調査・研究に関すること。記念事業に関すること。年史編纂に関すること。記念資料室に関すること。自己点検・評価に関すること。人権委員会の事務に関すること。人権講演会に関すること。」（第 33 条）と規定される。

(13) この移設にあたり、学生会館地下倉庫にあった大学創立 20 周年記念事業において校友会が制作した展示パネル約 50 枚が記念資料室に移管された。現在でも資料室で保管している。

(14) このときの呼びかけの文面はつぎのとおり。

追手門学院大学記念・文化財資料室では、学院関係ほか多くの資料を保存しております。そのため、日頃より資料を収集・整理しておりますが、欠番が多くみられるのが現状です。つきましては、下記資料に余分がございましたら、記念・文化資料室にご提供くださいますようお願いいたします。資料につきましては、閲覧利用に供するとともに、次代への貴重な財産として大切に保存させていただきますので、よろしくお願い

いたします。

⒂　和崎光太郎・小山元孝・冨岡勝「学校史資料論の構築に向けて－活用と分類・学校統廃合・アーカイブズ－」『近畿大学教育論叢』第 28 巻第 2 号、2017 年。

学院志研究室構成一覧

学校史整備委員会（学院志研究室の前身組織）

委員長	藤本　忠明（心理学部・教授）
委　員	垣内　成子（幼稚園・教諭）・田邊　雅一（小学校・教諭） 清水　一義（大手前中高・教頭）・横井　貞弘（大手前中高・教諭） 島本　美智男（経済学部・教授）・中村　啓佑（国際教養学部・教授） 西岡　健夫（経営学部・教授）・吉田　正（社会学部・教授） 宮本　直和（創立 120 周年記念事業事務局） 吉田　浩幸（大学事務部長、校友会館展示プロジェクト委員長）

2013 年度

一貫連携教育機構　学院志研究室	
室　長	三﨑　一明（経済学部・教授）
副室長	吉田　浩幸（職員）
研究室員	梶原　晃（経営学部・教授）・永吉　雅夫（国際教養学部・教授） 谷ノ内　誠（職員）・藤原　栄一（教諭）・藻川　芳彦（職員）・山本　直子（教諭）
調査員	横井　貞弘

2014 年度

一貫連携教育機構　学院志研究室	
室　長	植藤　正志（経営学部・教授）
副室長	吉田　浩幸（職員）
研究室員	梶原　晃（経営学部・教授）・永吉　雅夫（国際教養学部・教授） 谷ノ内　誠（職員）・藤原　栄一（職員）・山本　直子（職員）
学外調査員	三﨑　一明・藻川　芳彦・横井　貞弘

2015 年度

一貫連携教育機構　学院志研究室	
室　長	梅村　修（基盤教育機構・教授）
副室長	吉田　浩幸（職員）
研究室員	藤原　栄一（職員）・山本　直子（職員）
学外調査員	三﨑　一明・横井　貞弘・藻川　芳彦

2016 年度

一貫連携教育部　学院志研究室	
室　長	藤吉　圭二（社会学部・教授）
副室長	齊藤　一誠（基盤教育機構・教授）
研究室員	佐藤　伸行（経済学部・教授）・真銅　正宏（国際教養学部・教授） 豊島　眞介（基盤教育機構・教授）

2017 年度

一貫連携教育部　学院志研究室	
室　長	藤吉　圭二（社会学部・教授）
副室長	齊藤　一誠（基盤教育機構・教授）
研究室員	佐藤　伸行（経済学部・教授）・真銅　正宏（国際教養学部・教授） 豊島　眞介（基盤教育機構・教授）
調査員	住谷　研・武田　昌一・藤原　栄一・横井　貞弘

2018 年度

一貫連携教育部　学院志研究室	
室　長	藤吉　圭二（社会学部・教授）
副室長	齊藤　一誠（基盤教育機構・教授）
研究室員	佐藤　伸行（経済学部・教授）・瀧端　真理子（心理学部・教授） 真銅　正宏（国際教養学部・教授）・豊島　眞介（基盤教育機構・教授）
調査員	住谷　研・武田　昌一・横井　貞弘・吉田　浩幸

（敬称略）

□■□■2018 年度一貫連携教育研究所活動報告□■□■

月　日	主 な 活 動 内 容
7 月 4 日（水）	独立行政法人教職員支援機構「キャリア教育指導者養成研修」で三川俊樹所長が講義
8 月 1 日（水）・2 日（木）	玉川学園との研修会に三川俊樹所長、齊藤一誠副所長、辻本義弘所員および間下亮志所員が参加
8 月 8 日（水）	教員免許状更新講習（選択）で三川俊樹所長が講義
9 月12日（水）	独立行政法人教職員支援機構「キャリア教育指導者養成研修」で三川俊樹所長が講義
11月 5 日（月）	阪神奈大学・研究機関生涯学習ネット主催の「公開講座フェスタ 2018」で三川俊樹所長が講演
3 月 9 日（土）	茨木市×市内大学共催リレー講演「子どもの未来を拓く力を育む」で三川俊樹所長が講演 茨木市教育委員会主催「青少年健全育成研修会」で三川俊樹所長が講演

＊年間を通じて、所員の研究テーマおよび進捗状況の確認

□■□■2018 年度一貫連携教育研究所所員一覧□■□■

職名	氏名	所　　属
所長	三川　俊樹	心理学部心理学科教授
副所長	齋藤　一誠	国際教養学部国際日本学科教授
所員	辻丸　共美	幼保連携型認定こども園 追手門学院幼稚園保育教諭
所員	窪田　健一	追手門学院小学校教諭
所員	辻本　義広	追手門学院中・高等学校教諭
所員	間下　亮志	追手門学院大手前中・高等学校教諭
所員	東田　充司	基盤教育機構教授

追手門学院大学一貫連携教育研究所紀要　第 5 号

2019 年 3 月 31 日発行

発行者：追手門学院大学　一貫連携教育研究所
〒567−8502　茨木市西安威 2 丁目 1 番 15 号
TEL：072−641−9659

印刷所：協和印刷株式会社
〒615−0052　京都市右京区西院清水町 13
TEL：075−312−4010